



大遠忌を迎えるいま 考えておきたいこと

深川 宣暢 (ふかがわ せんちょう)

浄土真宗の救いは、^{ぶつがん しょうきほんまつ}「仏願の生起本末」を聞くところに成立します。言いかえれば、「如来さまの願いはなぜ起こされたのか、そしてその願いはどのように起こされ、どのように活動しているのか」を聞き受けたところに、私どもの救いが成り立つということです。

いま七百五十回大遠忌を迎える、この現代において、新たに「浄土真宗」を聞き、受け入れる人々とは、具体的にはどのような人々なのでしょう。どのような日暮らしをしている方々なのでしょう。

テレビのニュースで読まれる原稿でさえ、それを視聴する人々の具体像が想定されているといえます。家族構成、それぞれの職業、年齢、年収等々までが想定されていて、ニュース原稿の言葉遣い、表現レベル、一分間に何文字のスピードで話すかまで、一応の想定があるようです。そのスピードも一時代前よりはずいぶん早口になっているようです。

この大法要を迎える今、具体的にはどのような人々が「浄土真宗」を聞き、伝えてくださるのかを明確に想定しておくことは、私どもにとって、とても重要な作業であるように思えるのです。

※ ※

仏教においていわゆる「お説教」は、古来^{しょうどう}「唱導」とも言われてきました。この言葉の古い定義は、中国は梁^{りょう}の『高僧伝』（『大正大蔵経』巻五〇の四一七頁）に出ておりまして、「宣唱^{せんせうほうり}法理^{かいどうしゅうしん}開導衆心（法理を宣唱して衆心を開導すること）」だと定義した上で、唱導において^{たつと}貴ぶべきこととして、一に声^{おんじょう}（音声）、二に弁^{べんぜつ}（弁舌、抑揚）、三に才^{たう}（才能、機知）、四に博^{おんじょう}（知識、教養）という四つの要素が述べられています。

そしてその上に、「時を知り衆を知りて」説くなら、それを良き唱導ということができると記しています。つまり良き伝道の成否は、「時を知り相手を知っているか否か」にかかっているというのです。私どもは、現代のこの時期^{きょうぼう}において、教法が伝わる相手として、具体的にはどのような人々を想定すべきなのでしょう。

※ ※

積尊の時代に次のようなお話が残っているようです。

…ある時、積尊にむかってある村の長が、

「世尊はすべての人々に対して慈悲心を持ち、すべての人々を利益せんとのお心でおられるのに、ある人々にむかっては詳しく法を説き、ある人々のためには、さほど詳しく説かれないのはなぜなのでしょう？」と問うた。その時仏は、

「長よ、^{なんじ}汝は次のような時どうするだろうか？」

たとえばここに一人の農夫があって、彼に三つの田があるとする。その一つはすぐれた美田、他の一つは中等の田、いま一つは塩分をもった悪質の砂地であるとする。さて、これらの田に農夫が種子をおろそうとする時、農夫はまずどの田から種子をおろすであろうか？」

と、村の長は、

「農夫は、まず美田に種子をおろすであります。」

と答えざるを得ないとともに、世尊の意を理解した。

(布教研究所編『布教法入門』…二一～二二頁・武邑尚邦論文より取意)

※ ※

大遠忌を迎える今この時代において、その「美田」とはどのような人々なのでしょうか。まず国内では、それは「^{だんかい}団塊の世代」とよばれる人々だと思われます。停年をむかえてリタイヤし、一段落したところで「私の人生とは何だったのか、^わという思いが湧いてきます。記憶の器^{うつわ}の底にこびりついているような親・祖先たちの礼拝^{らいはい}の姿、^{しょうみょう}称名^はの声が、剥がれて浮いてくるような年代です。

幼い頃に歌った歌、眺めていた山や川そして街、そして無意識のうちに生活のシーンの中にあつたお仏壇の如来さまがあらためて見えてきます。お仏壇の無い生活をしてきて、わが子供たちは家庭の中で如来さまに深々と頭を垂れる人の姿など見たことがありません。しかし、親であるところの団塊の世代の人々は、それを見て成長し、街に働きに出ていったのです。その状況は種子をおろされるのを待っている美田のように思われるのです。

またアメリカやヨーロッパ、数は少ないけれどもその他の世界各地にも、決して広くはないのかもしれませんが、美田が存在しています。そしてそれは、より広く開拓できる可能性を持っているとも思われます。小さな株を大きく育て、株分けをすることも考えられるのではないのでしょうか。

団塊の世代の人々は、社会ではすでに壮年とは言われぬのかもしれませんが、宗教的にはちょうど壮年なのではないかと思ひます。これまでの壮年会や婦人会などの組織体系を、年齢制限なども含めて再考する必要があるとも思われます。

(司教)